

# 英国、インドネシア 日本語教育実習引率顛末記<sup>てんまつ</sup>

日本語日本文学科 馬場 良二

熊本県立大学文学部には、日本語教師養成課程があり、毎年、韓国、中国、インドネシア、英国、米国の5か国に教育実習生を送り出している。今年は、英国とインドネシアの実習団を引率した。英国への引率は、英語英米文学科2年の2名で10月20日日曜日から30日水曜日、インドネシアは、日本語日本文学科4年が2名、3年が1名、英語英米文学科3年と2年が1名ずつの計5名で、11月17日日曜日から24日日曜日だった。

2020年3月の退職をひかえ、教育実習の引率は、これが最後だ。以下は、その顛末記である。

## ■ ロンドンで

「予約がありません。どうやって予約しましたか？」

「ネットで。」

「どこのサイトですか？」

「AMOMAです。」

「AMOMAは、倒産しました。予約は、すべてキャンセルされています。AMOMAに電話して、返金してもらってください。」

ガーン。目が点、アタマ真っ白。

朝5時に起きて、7時26分のバスに乗り、福岡空港で実習生たちと合流し、11時半発の飛行機で、午後1時に韓国のインチョン空港に到着、午後2時半に英国行きの飛行機で日を追いかけ、同じ日曜日の夕方6時50分にヒースロー空港に着いた。ヒースロー空港からホテルまでは、実習生たちがタクシーを予約してあって、ポルトガル移民の男性が運転する車でホテルに直行、着いたときは、もう8時を過ぎていた。

現地時間では8時でも、日本時間では明け方の4時だ。立っているのも限界で、とにかく、部屋に入らなければ。そのままチェックインしたら、1晩、100ポンドで、ネット予約だと90ポンドです、と言う。6泊だから、差額が8,400円。もちろん、



ロンドンの地下鉄に乗り込んできたカップルと。

“May I take your photo with me?”, “Sure, of course.”, “You are beautiful.”, “Thank you. We are going to a Halloween party.”, “That’s nice. Have a fantastic party!”, “Thank you. Bye, bye.”

ノート型パソコンを取り出して、ネット予約を試みた。

ところが、氏名、アドレス、日程、その他、それから、カード番号を入力しても、予約ができない。カードの審査が必要だから、以下に何かを入力しろというのが、その「以下」に入力欄が何もない。何回もやり直し、フロントのスタッフにも助けを求めたが、どうにもならない。頭を抱えているうちに、10時になり、困り果てていると、別の女性スタッフが「どうした」と声をかけてくれた。事情を話すと、「ちょっと、待て」と言って、事務室に入り、戻ってくると、「大丈夫」と言って、ネット予約の価格で受け付けてくれた。

ただ、頭が混乱していたし、やっと休めると安心したしで、6泊を5泊と言ってしまい、5泊の予約と1泊の予約、二度手間になってしまった。

チェックインすると、「invoice」と印字された書類を受け取るのだが、それが朝食券でもあり、領収書でもある。初日に5泊分の「invoice」を受け取り、6日目に1泊分を受け取った。そして、チェックアウトのとき、1泊分の「invoice」をフロントに手渡し、そのままホテルを出てしまった。気づいたときには、あとの祭り。事務で領収証を提出しなければ、1泊分の宿泊代が出ないかもしれない 😊

## ■ IPA

英国での実習は、2018年からで、ポーランドでの実習を希望した学生がいたからだ。ポーランドの大学に問い合わせたら、実習団受け入れの窓口になっていた教授がもう退職し、受け入れられないと断られた。それで困っていると、英文科の先生が、留学先だった英国の大学は、日本語科に伝統がある、聞いてみようかと言ってくれた。すると、学科の授業に実習生を入れることはできないが、日本好きが集まった学生サークル (Japan Society) がボランティアで運営している日本語教室でなら実習ができそうだ、という。

“Japan Society”？ それなら、オックスフォードにもあるに違いない。オックスフォード大学には、かつての同僚がつとめていて、実習させてくれないかと、何年前に頼んだことがある。その時は、ボスがだめだと言う、だけだった。あらためて、ジャパン・ソサエティーはあるか、授業はしてるか、実習させてくれるかと聞くと、ソサエティーの会長を紹介してくれ、トントン拍子に話はすすんだ。

2014年にポーランドで音響関係の学会があり、同僚の先生と行った。古都クラクフだ。クラクフと聞いて、高校の同級生が1年間、日本語を教えに行っていたことを思い出し、日本語科の教員を紹介してもらった。ヤギェロン大学のフシチャ先生だ。

メールでやり取りし、学会の会場で待ち合わせをすると、韓国人の大学院生とポーランド人の学部生とを連れてあらわれた。クラクフは、かつてポーランド帝国の首都があった古都で、夢のような街並みに石畳が続く。ヤギェロン大学は、卒

業生にコペルニクスとヨハネ・パウロ 2 世のいる名門で、1364 年創建、行った時は、創立 350 周年だった。

先生は、大学の図書館と博物館、日本語科の教室や職員室を気さくに案内してくれた。素晴らしい環境だ。一回りして、職員室でお茶を出してくれた時、「私は日本語教師を養成していて、海外の大学で教育実習をさせてもらっています。私の学生を受け入れてくれませんか?」、「イイヨー!!」。

2015 年、女子学生 3 名、男子 1 名を連れて、再訪した。

2016、17 と希望者がなく、2018 年には、先生はもういなかったというわけだ。

文学部には、「演習」という科目があり、日本語教師養成課程には「日本語教育演習」がある。この時間に実習のための準備と実施後の振り返りをしている。

日本語教師にとって不可欠の能力は、例文をつくる力だ。その養成のため、「演習」では、年度初めに会話文を作らせる。ただ文章になっていけばいいのではなく、どういう関係のだれとだれが、いつ、どこで、何のために話しているのかが分かる、自然な会話でなければならない。2018 年、それをモンタナ大学の日本語の先生に見せたら、とても気に入ってくれて、授業で使ってくれた。それから世界に配信している。

2019 年、配信したら、ロンドン大学で 20 年日本語を教えているという熊本女子大学の卒業生の方からメールをいただいた。6 月に高校の同窓会に出席するために熊本にいらっしゃるといふ。「演習」の授業に来ていただいた。そして、そこで実習の受け入れを打診し、許可をいただいた。

2019 年の英国実習は、オックスフォードとロンドンだ。2018 年、オックスフォードは初めてだったので、挨拶のために引率した。ことしは、ロンドンが初めてで、2 年連続で英国へ行くことにした。

6 月から女子大の卒業生の方とやり取りをしているうちに、気が付いた。ロンドン大学には、音声学の伝統がある。検索すると、Dr Michael Ashby がヒットした。博士は、国際音声学会 (International Phonetic Association) の会長だ。9 月半ばに母音の無声化に関する疑問を添付して面会のメールを



日本語学校時代の同僚、萩原順子をアフタヌーンティーに招待した。二人で、金 12,698 円。さぞかしすばらしい食器だろうと期待していたが、ポットは金属だった。マカロン一つとケーキ一つが残さなかったのを見て、「ウェイターが「Good job!!」とほめてくれた。普通は、もっと残すらしい。オックスフォード大学の付属博物館、アシュモリアンのミュージアムショップで買ったイタリアプリントのシャツ、綿 100%を着て、ご満悦。

送った。返事がないので再送し、出発の二日前に「会いましょう」という返事が来た。しかも、頭に「Dear Professor Baba (Ryoji, if I may)」とある。(Ryoji, if I may) というのは、「もしかまわなければ、良二へ」ということだ。もう大学を辞しているの、オフィスがない。23日水曜日の午後3時半ごろ、どこか場所を見つけます。コーヒーかお茶でも飲みながら。

心が天に舞い上がった。

水曜日は、国際交流基金のロンドン事務所でワークショップがある。実習生二人と参加する予定だ。ロンドン事務所の近くがいいと言うと、では、事務所の前で待ち合わせましょう。私は、黄色いスカーフをしていきます。ありがとうございます。私は、ワインカラーの帽子をかぶって行きます。

夢のような時間だった。IPA(国際音声学会)の会長と日本語音声について議論している。「日本人です」の「です」は、普通「des」と発音され、「u」はきえる。「司会」の「し」も「shi」ではなく「sh」だけで発音される。日本語でこれらの母音「i」、「u」は、音声的な条件によって声帯の振動をうしなう。さらに、時によって、「刀」の「か」、「決心」の「け」、「心」の「こ」も声帯の振動をうしない、無声化する。「a」、「e」、「o」が無声化を起こすのは、音環境だけでなく、発話する際の表現の一つと言える。そして、無声化した母音を音声記号でどのように表記するか。

私は、30年もなやんでいる。Michaelは、日本語のこの現象に興味を持ち、真剣に聞き、私の疑問を理解しようと耳を傾け、アドバイスをくれた。私のひどい英語に疲れたことだろう。私は、私の英語を聞いてくれたことに感謝し、そして、もう少しまともに話せたら、もう少し議論が深まっただろうにと思う。

日本からお礼のメールにハロウィンとトイレの写真を添付し、返事をもらった。「See you again before long」。

## ■ 日本語教育

熊本には、湖東学園という学校法人がある。はじめは、1954年の移動幼稚園で、その後、幼稚園、保育園、幼児教育の専門家の養成、情報処理の専門学校などを手掛けてきた学校グループだ。2001年に日本語学校を設置し、それ以来、本学日本語教育研究室の卒業生を専任、非常勤として採用してくれた。その湖東学園がミャンマーに日本語学校を開くと言う。開校式が11月1日にあり、ヤンゴンへ行くことになった。

私は、何年も前から、アウンサンスーチー氏のいるミャンマーに興味があり、そうでなくても、日本語教師なんだから、ミャンマーの日本語教育事情が知りたい。二つ返事でOKしたが、英国実習からの帰りの旅程が決まっていて、29日火曜日にオックスフォードを出て、ヒースローを発ち、翌30日水曜日に韓国、インチョン経由で福岡に戻るようになっていた。航空券は、もう変えられない。結局、30日にインチョンに到着したら、そこから、そのままヤンゴンへ向かい、1泊して、

湖東学園の理事長一行と合流することになった。

## ■ インチョン空港での乗り換え

飛行機の予約が、福岡空港からインチョン経由、ヒースローの往復とインチョン-ヤンゴン-福岡との二つになった。ヒースローで荷物をあずけたら、そのまま福岡に行ってしまうのではないか。インチョンには10月30日の午後4時5分到着予定で、ヤンゴンへは午後6時15分発だ。乗り換えは、間に合うのだろうか。

福岡-インチョン-ヒースローの往復とヤンゴン-福岡は、アジアナで、インチョン-ヤンゴンだけ大韓航空だ。ヒースローからインチョンまでと、インチョンから

ヤンゴンとで航空会社が違う。ヒースロー-インチョン-ヤンゴンが一つの航空会社なら、インチョンへの到着が遅れた場合、ヤンゴン行きが待ってくれるかもしれない。でも、今回は、期待できない。

ヒースローでアジアナの案内に聞いたら、まず、インチョン-福岡をキャンセルしろと言う。言われたとおり、キャンセルの手続きをした。これで、



荷物が福岡へ運ばれることはなくなった。

それから、セルフではない、アナログ式の手荷物カウンターへ行き、スーツケースを預ける。航空会社が違うし、予約が2回に分かれているので、スーツケースは、一度、インチョンで受け取らなくてはならないと言う。怖れていた通りだ。荷物の受け取りは、入国管理のあとだから、入国審査を受けなくてはならない。インチョン空港で時間を食う。

カウンターの女性に乗り換えに間に合うだろうかと言ねると、時間はどれくらいあるか、と聞く。2時間だと答えると、「ダイジョーブ」と笑う。ますます心配だ。

ヒースローからの飛行機は、夜の8時10分。どういうわけか、帰りの飛行機では、いつも眠れない。今回は、乗り換えが気がかりで、なおさらだ。眠れないまま着いたら、入国審査、そして、荷物を受け取り、ターミナルビルを移動する、移動方法は、バスだろうか、地下鉄だろうか、一晩中、気をもんだ。

到着し、ターミナル移動のためのバスに乗ろうと外に出たところで、スカーフのないことに気がついた。航空会社に言えばさがしてくれるだろうが、そんな余裕はない。11月13日にソウルから熊本へ来る友人に、たのもう。非常時だから、そ

れくらい許されるだろう。

インチョン空港は、韓国の誇る東洋の大ハブ空港だ。本当に広大だ。いや、無駄に広大だ。シャトルバスが進むにつれ、向かっているはずのターミナルビルがズンズン遠のいていく。世界中のどこの空港だって、ビルが滑走路のこっちとむこうなら、地下にトンネルを通すだろ、と思ったって意味がない。今から穴を掘るわけにもいかない。

入国審査は、自動化されておらず、列は、思い切り長かった。荷物は、ポツリ、ポツリと一つずつしか出てこなかった。大韓空港のカウンターを探し、チェックインしたところで、一息ついた。手荷物検査では、優先手続きの列に入れてくれたが、その列の長さは他のとかわらず、出国審査に優先の列はなかった。気が気じゃなかった。



インドネシア、ブラウウィジャヤ大学、3年生の会話の授業で。実習生が作成した「志望企業での面談」の音読練習をしている。

冷や汗と熱い汗とをかきながら、ヤンゴン行きのゲートに突っ込んだ。

## ■ アジアからの留学生

私が日本語学校に勤めたのは、1982年からで、その頃の留学生は、ほとんどが台湾からだ。1980年代の終わりから、中国人が増え始め、21世紀になって気が付くと、ベトナム人とネパール人が多くなっている。

どうしてなのか知りたくて、去年の3月、ベトナムへ行ってみた。いくつかの日本語学校で目にしたのは、日本行きを夢見る若者たちの熱気だ。一方で、夢見た先の日本でひどい目に遭い、自殺にまで追い込まれる若者がいる。ベトナムを愛する心ある日本語の先生たちの心境は複雑だ。でも、彼らは、学習者の夢の実現のために日本語の学習をたすける。それが私たちの役割だし、私たちにはそれができる。

今のところ、ミャンマーから来るのは技能実習生だけで、留学生は、ほとんどいない。でも、これから国力をつけ、増えるに違いない。

## ■ 九州ミャンマー友好協会

日本とミャンマーをつなぐ団体は、二つあるようだ。2012年に始まった、一般社団法人「日本ミャンマー協会」と1972年に始まった「日本ビルマ文化協会」を

前身とする、社団法人「日本ミャンマー友好協会」だ。そして、九州には、一般社団法人「九州ミャンマー友好協会」がある。

地方に団体があるのは九州だけで、あとは、「日本ミャンマー友好協会」に関東支部がある。

その「九州ミャンマー友好協会」の事務所は、湖東学園にあり、理事長が副会長で、今年の7月に「ミャンマーセミナー2019 in 熊本」が開かれた。セミナーでは、朱の僧衣に身を包んだミャンマーからの長老二人が「ミャンマーの“心”を語る」という講演をなさった。

北九州市門司港の和布刈園山頂には、世界平和パゴダが聳え立つ。第二次世界大戦時に門司港から出兵した戦没者の慰霊と世界平和の祈念を目的として、1958年に建立されたミャンマー式寺院で、このお二人が慈経を唱えておられる。

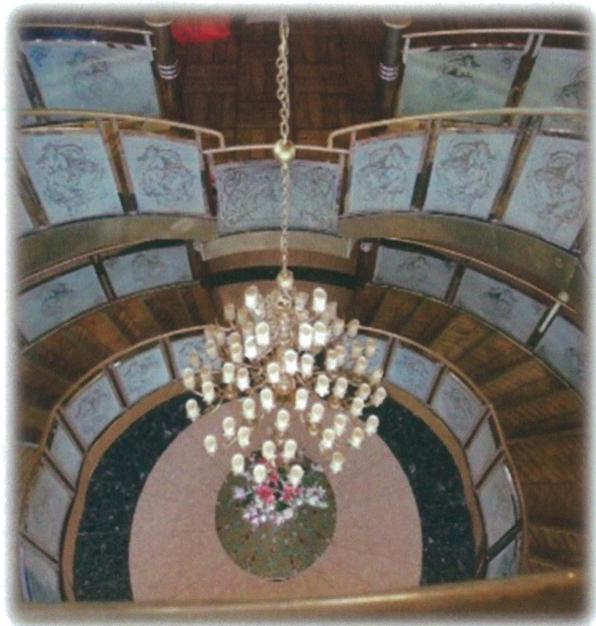
日本へのミャンマーのまなざしを初めて知った。

## ■ ミャンマー視察団

ミャンマーへの視察は、湖東学園の創立者である理事長、学園の日本語教師、事務担当、友好協会の会員、そして、私だ。

「開校式」と言っても新しい学校を開くわけではなく、湖東学園と提携することで、すでにある日本語学校を「Coto College Myanmar」と改名して、新しく出発するというものだった。

式は、豪華だった。ホテルとしてヤンゴン川に浮かんでいる、シャンデリアとフランス式アールヌーボーのすりガラスに飾られ



かつては世界のどこを航海していたのだろう。

た螺旋階段の5階建て客船には瀟洒なエレベーターがついていた。セレモニーの後は、着飾った来賓とともにミャンマーの昼食を楽しんだ。

日本語学校は、ミャンマーから日本への人材派遣会社が経営している。会社のナンバー2がDr. Thet Naung Tunだ。その名から、みんな「哲也さん」と呼んでいる。父親の仕事の関係で、足立区の小学校に通った。そして、今、日本との懸け橋となっている。

子どもの頃、嫌なことはなかったかと聞くと、「いじめられた」と言う。「それでも、嫌いにならなかったんですか」、「ならなかった」。良かった。

日本語学校の授業を見学させてもらった。目を輝かせた若者たちが、大きな声で熱心に日本語を復唱していた。どうぞ未来が拓けますように。

## ■ 文法はパーティー

インドネシアでの実習先は、ブラウィジャヤ大学だ。ブラウィジャヤ大学は、学生 30,000 人を擁する国立大学で、インドネシア第 2 の都市、スラバヤにある。文学部言語教育学科に日本語日本文学専攻と日本語教育学専攻があり、日本語教育学専攻のリク・フェブリアンティ先生が私の研究室で修士号を取った縁で 2014 年から実習団を受け入れていただいている。

日本からスラバヤへの直行便はなく、今回は、クアラルンプール経由だった。17 日曜日に熊本から羽田に飛び、羽田からバスで成田へ、成田で 1 泊して、月曜日の朝、実習生たちと合流、クアラルンプールへ。クアラルンプールでは、空港内のホテルに泊まり、火曜日の午前中、ようやくスラバヤに着いた。大学は、マラン市で、スラバヤの空港からは大学の車で 2 時間かかった。

木曜日の授業は、「文法」だった。担当は、4 年と 3 年の女子二人。「ジョギングをして、シャワーを浴びて、会社へ行きます」、「この部屋は広くて、明るいです」のような「～て、～」で 2 文をつなぐ文型と、「コンサートが終わってから、レストランで食事しました」のような「～てから、～」、そして、「カリナさんは背が高いです」のような「～は～が～」の三つの文型を学習する。教科書を読んで覚えるだけだと、つまらない。

授業では、まず名札を作ってもらった。作成時に実習生全員と私とが声をかけて回る。キキという学習者には「黒い猫ですね」、ナディアには「インドネシアには、ナディアがたくさんいます」、「ええ、ナディアはたくさん<sup>1</sup>」。おしゃべりがはずむ。

学習項目を使った文が正しいかどうかの○×ゲームをやった。広い教室で、25 名の学習者が右へ行ったり、左へ来たり。好きな芸能人、キャラクターについて、「可愛くて、歌が上手です」、「～はインドネシアのアイドルで、目が大きいです」などをプリントに書き込んでもらう作業時には、「どんな歌を歌いますか」、「ヒジャブをかぶっていますか」など尋ねて回った。ちょっとしたパーティーだ。

## ■ 若君<sup>まさみ</sup>誠美 vs 五月<sup>ゆうた</sup>勇拓

空港までの出迎えから、昼食、夕食、買い物、見送りまで、4 年生のウイズさんとユダさんが親身になって面倒を見てくれた。

ブラウィジャヤ大学日本語教育学科のメインテキストは、『みんなの日本語』だ。研究室にあるテキストと現地の学習者が使っているテキストとでは、微妙に字句が違っていることがある。それで、実習生がウイズから借りたら、中表紙に「渥美貴弥」とあった。「これは、何だ」と聞くと、日本人の友達につけてもらった名前だと言う。何で「渥美」で、何で「貴弥」なんだろう。本人も理由を知らない。

した。その時の学生は、台湾人ばかりでした。それが、中国人にかわり、そして、彼のフルネームは、Wizurai Areta Muserry、ウイズライ・アレタ・ムセッリで、Wizurai は古マレー語で「若い王子」、Areta はインドネシア語で「3月末」、Muserry の Mus はアラビア語で「誠実」を意味する父親の名から一部をとり、Erry はインドネシア語で「美人」を意味する母親の名から一部をとったのだと言う。それで、それをそのまま、「若君誠美」とした。私が、ウイズの名付け親だ。



五月勇拓(左)と若君誠美(右)

若君はとても喜んでくれ、相方のユダに自慢した。ユダのフルネームは、Yuda Meison Effata、ユダ・メイソン・エファッタ。ユダは、母親が教師で、教え子にすばらしい生徒がいた。その生徒からとったという。ある時、リク先生が、「ユダ」とは、ヒンディ教の聖典『バラタユダ』の「ユダ」でヒンディ語だと教えてくれた。意味は、「先祖、勇気」。Meison は、英語で、「May son」五月の息子、Effata は、ヘブライ語で「開く、拓く、はじめる」。彼は、キリスト教徒なのだ。

ユダは、カリマンタン島出身で、Dayak 族の中の Kenya 系だ。プロテスタントの宣教師が来て、島の北部から布教活動をし、その時、Dayak 族の Kenya 他、いくつかの種族が Gereja Kemah Injil Indonesia と呼ばれるプロテスタントの宗派に帰依している。

「拓く」の「拓」をとって、「勇拓(ゆうた)」と読ませた。もとが「ユダ」だから、ちょうどいい。



インドネシアは、多民族国家だ。宗教もモザイク模様を呈している。名の付け方は、自由で、美しく、多彩な言語に彩られてもいる。

マラン市内のサテ・アヤム(鶏肉の串焼き)の屋台。本物の炭火だ。バナナの葉にくるんで米を蒸したご飯、飲み物つきで一人、200円。

## ■ 日本語の語アクセントと発話イントネーション

これが最後だからだろうか、特別講演を依頼してくださった。内容は、3年生50名を対象の「発音」だ。インドネシアをはなれる日の前日、11月22日(金)の午後3時から4時10分まで、タイトルを「日本語の語アクセントの習得」とした。語アクセントの体系をおさえ、その習得をめざす。50人が相手であっても、「講演」ではなく、「実践」だ。

日本語教育の歴史が新しい国の学習者は、ほぼ間違いなく、母語式の発音が身につけてしまっている。それをどれだけ日本語らしくできるか、試される。

まず、名を名乗り、日本の食べ物で何が好きか聞いた。「すし、うどん、タコ焼き」。

「すしを…?」

『食べます。』

「そうですね。すしを食べます、はいっ、みなさん。」

『すしを食べます(コーラス)。』

「では、水を…?」

『飲みます。』

「そうですね。水を飲みます、はいっ、みなさん。」

『水を飲みます(コーラス)。』

「(飴をつまみ、口に運ぶジェスチャーをしながら)では、飴を…?」

『……………。』

しばらく待ったが「なめます」はでてこないようだった。

「飴をなめます。はいっ。」

『飴をなめます(コーラスと指名)。』

「(空を見上げ、両手のひらで雨粒をうけるジェスチャーをしながら)雨が降ります、はいっ。」

『雨が降ります(コーラスと指名)。』

「飴」だと発話末に向かって音調が上昇していくこと、「雨」だと下降していくことを確認し、体験してもらった。そして、「すし、うどん、タコ焼き」をホワイトボードに書き、さらに、日本の食べ物を言ってもらい、加えていく。

うどんが  
どらやきが  
おすしが  
すしが

タコ焼きが  
ラーメンが  
チキンカツが  
さしみが

お好み焼きが  
そばが  
おにぎりが

てんぷらが

格助詞「が」<sup>2</sup>を足して、「一が好きです」をコーラスしたり、個人にあてたり、

十分、繰り返したあと、「ラーメン」はどこが高いか学習者に聞き、「ラ」が高い、頭が高いから「頭高型」だと、板書する。「すし」は「し」が高く、語の最後、「尾（しっぽ）」が高いので「尾高型」と板書する。同じものでも「おすし」は「中高型」だ。「うどん、タコ焼き」は、下がらない、最後まで上がっていき、宙に消えていく。「平板型」だ。

日本語の語アクセントは、この四つの型しかないことを説明し、「ーが好きです」で入れ替え練習をする。

食べ物の次は、「ーです」の文型に「髪、頭、首、肩、腕、足」などの体の部位を、そして、「ボールペン、かばん、机、椅子、教室、窓」など、そこにあるものを入れていく。

ブラウイジャヤ大学の学生は、優秀だ。言わせるとインドネシア語の発音だが、脳には、CDなどを通して、日本語の音声が蓄積されている。彼らは、少しずつ日本語の音調の体系を習得し、机、窓を指すだけで、「机です」、「窓です」と発音するようになった。

説明などしない、身振りと日本語でのやり取りだけで、学習者の発音が見る見るうちに日本語らしくなっていく。指揮者のタクトで鳴るオーケストラのようだ。学習者の持つ力を引き出す充実感。楽しかった。



講義を終え、ブラウイジャヤ大学の学生、先生方、実習生たちと。馬場の左がリク先生。

1990年から、毎年、どこかしらの国へ引率をしてきた。それが終わると、ホッと息をつく。今年は、それが2か国だった。福岡、インチョン、ヒースロー、オックスフォード、ヤンゴン、羽田、成田、クワラルンプール、スラバヤ、マラン。そして、長い旅が終わった。

1 インドネシアには、「ナディア」という名の女性が多い。

2 平板型の語と尾高型の語とは、後ろに格助詞をつけないと、違いが分からない。